

犬がいる風景

南村 康弘



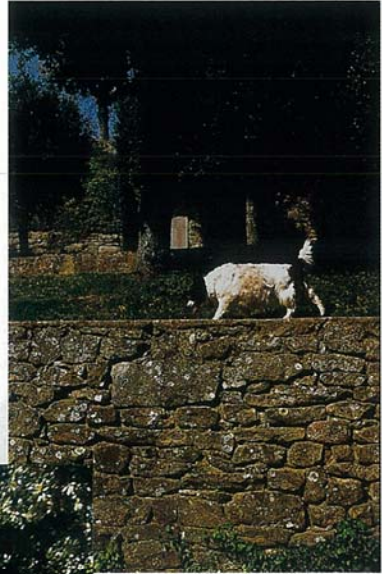
ロンドン 1996

写真とは何でしょうか？

写真とはカメラという機械と、フィルムや印画紙など感光材料を使って、ほとんどあらゆるものの一面を、短い時間で記録できるというメディアです。



パリ 1997



フィレンツェ 1998



大阪 1998

1960年ごろまでの写真は、カメラのシャッタースピードや絞りの大きさなどを勘で、あるいは露出計を使って明るさを測って写していました。モノクロームが主体の写真では、修練によって、勘でも間違いなく正確な露出で、完全なネガフィルムが作れました。カラーフィルムはデリケートなので、専門家でも露出計が必要でした。写真を撮る技術そのものが難しく、うまく写せたら上手だといったものでした。

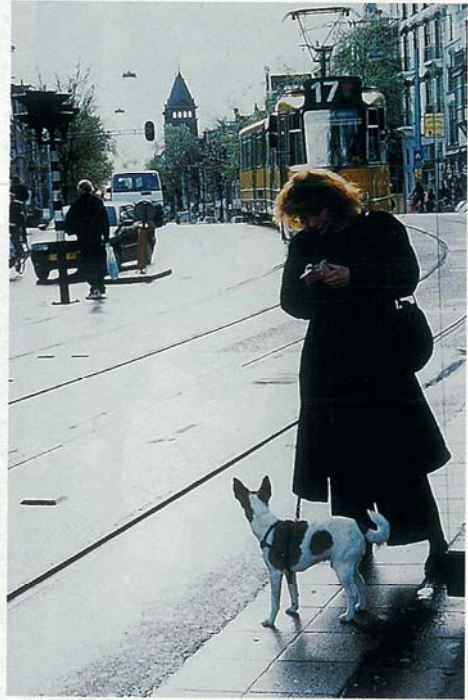


ペローナ 1998



ローマ 1998

現在の写真はカメラが露出計を内蔵し、それもシャッターや絞りと連動して、自動的に正確な露出をしてくれるのです。フィルムなどの性能も驚くほどの進歩です、そこで、「写真は簡単になった、押せば写る」といわれているのです。



アムステルダム 1998



パリ 1999



ベネチア 1998



ベルノン (フランス) 1999



ロッダム 1999



神戸 1996

写真は本当に簡単なのでしょうか？

写すべきものが目の前にあるのなら、かなり簡単だといえます。こんなものを撮影して欲しいという注文なら、そして事件や事故の写真なら、写すべきものが目の前にあるのですから、比較的簡単です。

けれども、いろいろな写真をごらんになって、素晴らしいと思われるのは、ほとんど、いつどこで出会うかわからないものや、事柄をキャッチしたものではないでしょうか。



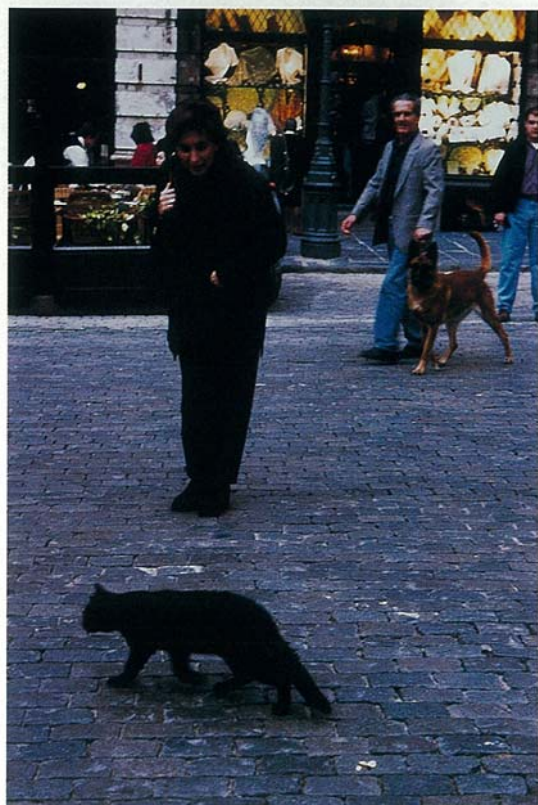
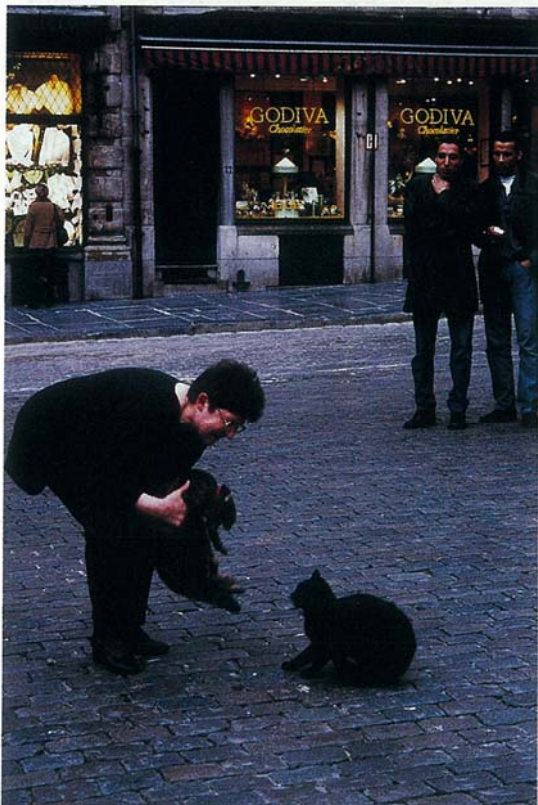
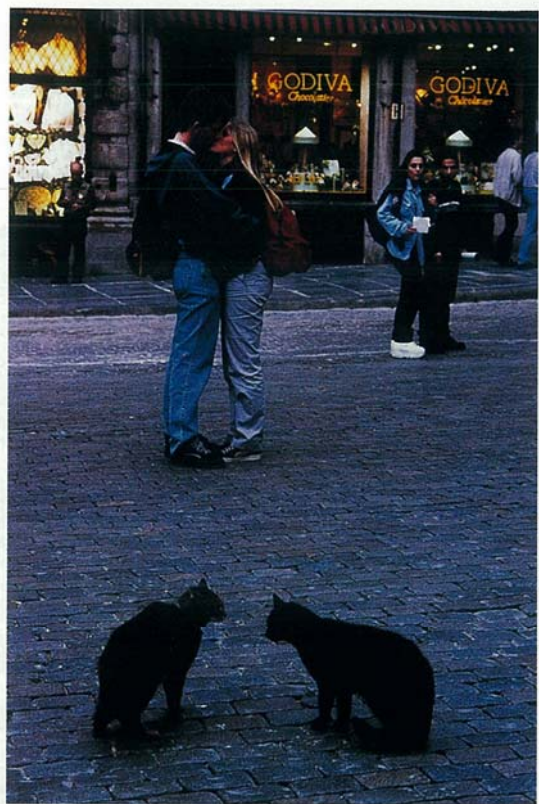
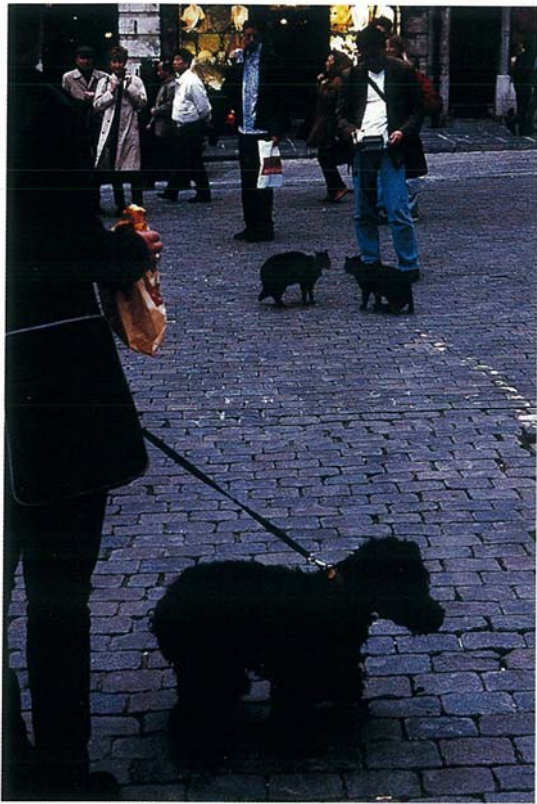
ブルージュ 1999

見たとき撮らないと写らない

写真は見たときが写真のときで、そのとき撮らなければ写りません、記憶や思い出で写真は写らないのです。

私は長い写真記者生活の間、いつもカメラを手放すことはありませんでした、今も郵便局に行くときでもカメラを持っています、それは、もし何か気になるものに出合ったとき、自分がそれを記録できなかつたら、どんなに悔やむだろうと思うからです。ただこれまでの長い間、歴史に残るような出来事に出合ったことは一度もありません、それでも、明日出合うかもわからないと、カメラは放せないのです。

さて、写真の難しさを理解していただけるでしょうか。





リスボン 1998

徘徊（はいかい）のメディア

写真は歴史の記録ですが、そればかりではありません。このような機能を使って表現ができる世界でもあります。しかし、見たときが写真のときですから、とにかく、はいかいしなければなりません。歩いて歩いて見つける。また歩くのです。考えてから写すのでは間に合わないことが多いので、見えたものはまず写し、良いものは残し、そうでないものは捨てるという作業です。良いものとは何でしょうか？。安井仲治さんという先人の「碌でもないものに感心せぬがよろしい」という言葉は忘れないようにしたいと思っています。



パリ 1999

「犬がいる風景」

ごらんいただく「犬がいる風景」は、犬を見たらカメラを向けることを続けていて、できた写真です。気持ちのいい情景で面白い瞬間があれば撮ろうとするのですが、相手はそれぞれの都合で歩いたり、寝そべったりするので、めったにうまくいきません。これらは数年にわたっていろんな場所で見つけ、捕らえることができた中から、人の心の機微に触れそうなシーンを選んで制作したもので、笑って楽しんでいただければうれしいと思います。